

「飛行精度」

田中蜜柑

「いつも聞く爆音と、いつも見える海面のきらめきがあった。快晴。計器に異常なし。それでも、僕は不満だ。僕はもう一度しっかりと操縦輪を握りしめる。少し緊張している。」

僕の空想も彼らの空想も、所詮は決まりきった現実と非現実を往復する。どこまでも、どこまでも行きたいと願い、繰り返してまた戻ってくる。

停滞と閉塞を嫌い、見たことの無い空を見ようなんて言う。いつも歩いている道を、いつも歩くことがいけないのだ。何処にも行けないのは分かっている。いつも歩いている道でも、踏み方を変えられることも聞いた。

旋回、上昇、降下。どんなアプローチでも許容できる世界に枠組みを与えるのは誰だ。道を踏み外した先を、見てもいいだろう。中庸を見定める為、極端が必要だ。

「ポート337、貴機を視認。着陸を許可する。」管制官の無機質な声が耳に響く。

「了解。」

徐々に機体の高度を下げ、滑走路に近づく。平坦な滑走路が視界に入る。僕は不意に不思議な昂揚を覚える。

「機長。降下率が過大だ。」有能な副官が僕を制する。彼は少し有能すぎる。操縦輪をぐっと握り直してさらに降下率を上げる。まだ見ぬ景色が見たい。それだけ。それだけ。僕は奥歯を噛み締める。副操縦士がいぶかしげな視線を投げかけてくる。

「問題ない。問題ない。計器を再確認してくれ。」

僕は鈍らな返事を返す。一応、僕の方が年上だ。それでも彼は素早く現状を把握した。

「機長。操縦を代わります。」

わかった。わかった。お遊びはこれまで。操縦輪を引き、降下率を規定まで戻す。途端に僕の額から汗が噴き出した。僕は顔をしかめる。

「問題ない。着陸を続行する。」

着陸の瞬間、燦々と輝く太陽が見えた。機窓から確かに見えた。

「副機長。お疲れ様だ。ヒヤヒヤしたろう。すまないね。」

彼は鋭い眼差しで僕を見る。僕の眼球の裏側に、何があるのかを知りた

いのだろう。せめて口角を上げて愛想を良くする。

僕は彼の視線を避け、機体を後にした。非日常を抜け、現実に戻って行く。人波に紛れ、雑踏に戻って行く。

「所長。お疲れ様です。」

「おう、君か。特に異常はなかっただろうね。」

「ええ、問題ありません。」

「次のフライトは明後日だ。よく休みたまえ。」

僕は所長に再度挨拶をして部屋を辞した。明後日の勤務まで、僕は眠ったように生きる。死人のような鈍らな眼で街を見て、現実と非現実の境界を通過する。

午前一時を過ぎた。飛ばせてくれ、飛ばせてくれ。ひたすらアルコールで気を鎮めようとする。もうだめだ、これはだめだ。飛びたい、飛びたい。停滞が僕を押し潰す。ははは。どうして…、いつもこうだ。誰か勤務を交代できる奴はいないか。いつからの幻想が僕を苦しめるんだ。ただ職務に忠実でありたいだけだ。

「おお、君か。今日はいいい天気だ。体調は万全かね。」

「もちろん。体調は万全です。」

操縦輪の感触が心地よい。とても心地よい。

「ポート772。離陸を許可します。」今日の管制官の声は、心なしか弾んでいる。

「了解。いい天気だ。また会おう。」

快晴。計器に異常なし。いつもいつもこうなんだ。どうもだめだ、退屈だ。僕は軽く操縦輪を揺らして翼を振る。気流の乱れを感じる。もう一度振ってみる。機体が軋んでいる。これ楽しいよ。

「機長。どうかなさいましたか。」

「またこいつだよ。」

「いや、順調だよ。雲の形が面白いだけさ。」

外乱を制御し順応する。それだけが僕らの務めだろう。そうでなければ、無能の代償を払うのだから。空港が見えてきた。悪くない兆候だ。